



タクシー・ ドライバー

11月18日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

11月18日のおはなし「タクシー・ドライバー」

大きい方の月がもうすぐ沈む時間、葦沢が何かを言う。わたしはテントの中をのぞき込むが、どうやら寝言らしい。再び焚き火のそばに戻り酒を飲む。グレンフィディックと呼んでいるが、ただの地酒だ。この土地で取れた穀物を使って何年もかかって作り上げた、それらしい飲み物だ。喉がやけ、少しばかり何かの香りがする。何が一番近いかというと、草っぽい薬用アルコールとでもいえいいだろうか。それをわたしたちはグレンフィディックと呼び、ちびちびとなめる。

焚き火にくべるのはライボクの枝だ。枝振りが稲妻のようだというので、雷の木、ライボクと名付けたのは葦沢だ。葦沢はいろいろなものに気の利いた名前をつけるのが上手だ。毎朝けたたましい鳴き声で眠りを破る小鳥はケタスズメ、草原をうっそりと歩き回る牛ほどもある両生類にはウソガエル、雪山で見かけた猿人にはイエティ男。思わず笑ってしまうし、一度聞くと忘れない。

葦沢が故郷で何をしていたのかは知らないが、ここでは名前をつける人として重宝がられている。本人もその生活を楽しんでいるようで、他の連中同様、過去の話は一切しない。日本人だということ以外、どこに住んでいて、何をしてきたのか、手がかりもない。わたしとは仲がいい方だと思うが、それでも見事なまでに来歴を明かさない。彼ほど意志の強固な男は知らないし、いったん口を閉ざすと決めたなら、もう何も聞き出すことはできない。彼に帰るべき故郷はないし、語るべき過去もない。葦沢とはそうした男だった。

しかし昨日、ライボクの枝で傷を負って、ほとんど意識を失ってからの葦沢は、日頃と同一人物とは思えないくらい弱々しくなり、時折ふがふがとしゃべる言葉も意味不明になっている。ひょっとすると葦沢は、本当は日本語が母国語ですらないのかも知れない、とわたしが半ば真剣に思い始めたところで、その言葉を聞いたのだった。

「首都高3号線で用賀まで」確かに葦沢はそう言った。おそらくタクシーの運転手に行き先を指示しているのだ。これは面白い。かつて三軒茶屋から世田谷線を利用してわたしにとって、首都高3号線はなじみ深い高速道路だ。わたしはかなり驚き、改めてテントをのぞき込んだ。やはり葦沢は日本人だった。しかも東京の、それもごく近所に住んでいたらしいということもわかった。

「なんだ、ご近所さんじゃないか」愉快的気分になって、そう声をかけながら近づいたその時、異様な臭いに気がついた。見ると葦沢の顔の色がどす黒く変わり、細かくハッハッと息をするのだが、その呼気が夏の初めの草っぱらのむっとするような草いきれのような臭いをたてている。一瞬にして目は落ちくぼんでしまい、手先が細かく震えている。わたしは声を張り上げ呼びかける。「葦沢！ 葦沢！」

その夜のうちにあっけなく葦沢は死んでしまった。ほんの少し前まで穏やかな顔をしてすやすやと眠っていたのに。あまりの唐突な死にわたしは悲しむこともできずにいた。此花という医師が翌日の午後になって姿を現し、「ライボクで怪我をしたら助からんよ」とだけ言って帰っていった。知っているなら、先に言え。しかし死期が迫っていたと知っていたら何ができただろうか。別に何もできはしない。でも、いまならわかる。葦沢は家に帰ろうとしていたのだ。首都高3号線を用賀で下りて。

地球はあまりに遠い。用賀の家に連れて帰ることはできない。もちろん用賀の家なんてものが、あの戦災を乗り越えて、その後も取り壊されなかったとしての話だが。なんにせよ葦沢はこの辺境の惑星に土葬で埋められ、皮肉なことにライボクの墓標をすえられた。葦沢の名付けたヒマユリの白い花を供え、グレンフィディックをあたりにまいてやると、もう、かけるべき言葉もない。あの夜、言うべきだった言葉を呟く。そしてその言葉をかけてやるんだと痛切に悔やむ。

「お客さん、起きてください。そろそろ用賀ですよ」

(「首都高3号線」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

タクシー・ドライバー

<http://p.booklog.jp/book/39040>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39040>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39040>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.